

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.16
SUMMER 2009



目 次

● メッセージ

国文学研究資料館とコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所 松崎碩子	1
文化都市立川への一はけ 星野紘一郎	2

● 研究ノート

『近世・近代の地主経営と社会文化環境 ー地域名望家アーカイブズの研究ー』 福田千鶴	3
「御夢想の連歌と御夢想の肖像画-家光の家康追慕-」 入口敦志	5
連携展示「百鬼夜行の世界」小林健二 齋藤真麻理 江戸英雄	7
「江戸の長編読みもの-読本・実録・人情本-」の予告 大高洋司	9

● トピックス

コロンビア大学東アジア言語文化学部との学術交流協定の締結	11
第2回日本古典文学学術賞受賞者決定	11
連携展示「百鬼夜行の世界」の開催	11
平成21年度連続講演	12
第33回国際日本文学研究集会の開催	12
新収資料紹介	13
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況	14
サテライト講座の開催	14
表紙絵紹介	15

国文学研究資料館と コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所

松崎 碩子（コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所 所長）

1996年2月8日、故ベルナール・フランク教授の御自宅で、当時の国文学研究資料館長故佐竹昭広先生とフランク先生が、「国文学研究資料館とコレージュ・ド・フランス日本学高等研究所との間における学術交流に関する覚書」に署名された。その後、両機関の間で交流が盛んに行われるようになったことは言うまでもない。しかし、国文研との関係はずっと以前に遡る。私事であるが、高校時代の恩師故福田秀一先生から、1970年代初め、「国文学研究資料館」が新設され、先生もその資料館勤務になられたというお便りを頂いた。その後間もなく私は、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所に勤めるようになり、ベルナール・フランク所長や、国文研初代館長故市古貞次先生に日本留学中指導を受けられたジャック・リース・ビジョー先生などを通して、国文研とのお付き合いが始まった。福田先生もバリエに和古書の調査にみえ、フランク、ビジョー先生とも一緒にバリエ郊外ノジャン・シュール・マルスにあったスミス＝ルスエフ文庫（フランス国立図書館管轄。現在はリシュリユ館で所蔵）を訪問したことが思い出される。その後も、小山弘志元館長をはじめ国文研の先生方が学会、和古書調査、その他でバリエにいらっしやると、当方の研究所に立ち寄って下さり、フランスの研究者たちとの学術情報交換が行われた。フランスからも、フランク、ビジョー、エライユ、ロテルムンド、ロベール教授など研究所とゆかりの深い先生方が国文研から長期招聘され、本場で研究に打ち込み、日本の専門家と意見交換を行う機会を与えて頂いた。

このように不定期に行われていた学術交流を、定期的に、もっと多くの研究者、特に若い研究者や学生も享受できるようにと、上記覚書が交わされたわけである。この覚書締結は、佐竹、フランク、ビジョー、三教授の御尽力の賜物である。覚書締結後は、1996年11月、当方の研究所に於いて、松野陽一先生の『六百番歌合』についての御講義を皮切りに、毎年一人、国文研から先生を一ヶ月間派遣して頂き、4回の講演をして頂いた。当方からは、毎年三人の研究者、つまり、延べ30人の研究者を三週間、国文研に派遣し、日本研究の本場で直接先生方の御教示を仰ぎ、フランスでは入手困難な資料を手し、研究することができた。その成果は次々と発表されている。そこで、この間、

この交流実現のためご尽力下さった松野陽一館長に深く感謝申し上げる。また、国文研のサイトに掲載されている『日本文学・日本学データベース（翻訳本等）』は、フランス日本研究学会協力のもとに、当方から派遣した司書が作成したものである。このデータベースは、フランスに於ける日本研究の成果を世界に紹介するだけでなく、今後の研究の参考文献としても役立つことと思う。

当方の研究所は今年創立50周年を迎える。それで、9月10、11日に記念シンポジウムを開催することとなった。テーマは、「資料とその周辺」。当方では、研究の出発点ともいえる資料収集に力を入れてきた。その殆どは活字本であるが、フランクお札コレクション、明治初期に来日したフランス士官が持ち帰った資料等特殊コレクションもある。そこで、研究所のパートナーともいえる国文研から、今西祐一郎館長、伊井春樹前館長、谷川恵一、寺島恒世、久保木秀夫と先生方をお迎えし、現在の日本文学研究の動向を、資料紹介とともにお話し頂くこととなっている。

また、今年度から科学研究費を得て、「集と断片」という新しいテーマで共同研究を始めることとなった。この共同研究は、2007年2月16日にコレージュ・ド・フランスで開催されたシンポジウムで、問題提起や提示の可能性をめぐっての予備的な研究発表と討議を行っている。これを機に、今後国文研との学術交流がますます活発に行われ、フランスでの日本研究の大きな発展が大いに期待される。



〔コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所 図書館の閲覧室〕

文化都市立川への一はけ

星野 紘一郎（出版メディア研究室 代表）

タイトルの「一はけ」とは、国文学研究資料館の建つ立川市という地域コミュニティへの一はけ、言ってみれば学問研究の野生の息吹きの一はけのことである。

私は立川の最寄駅近くに移り住んで40年ほど、資料館がこの地への移転する噂を聞き、呆然とした一人でもある。この間、編集者として立川北奥にある国立音大にしばしば通い、休日には子どもをつれてデパート屋上の遊園場に上った。車窓から交通渋滞する街路を舌打ちしながら眺め、屋上からだんだん上に伸びてくる街並みを見てきた。移転の話を耳にした頃にはこの街に出掛けることがほとんどなくなっていた。それでも「立川移転で大喜びするのは私だけでしょうねえ」など軽口を叩き先生たちが無然とされたのを覚えている。

移転がすんでそのお披露目の前に、ある日思い立って新資料館を訪ねた。モノレール駅から見当つけて、雨のそば降るなか歩きまわったがなかなかたどり着けない。おかげでまだ途上にある基地の巨大な再開発の姿をつぶさに見ることになった。やっとたどり着き、そびえるその威容に肝をつぶした。その日は土曜日で休館だった。あまりガッカリせず雨も上がった道を立川まで歩いて帰った。

再開発と言えば、立川市街の20年は大きなスケールで進められた再開発の歴史で、その最も成功した1例だろう。

JR立川駅北口の西、「ファール立川」のビル群は、「都市施設の機能にアート（彫刻）がとけこんで一体」となった都市インフラのおしゃれな景観をなしている。その更に西に南北にモノレールが貫通して、駅前のひどかった渋滞が消えて、北への見晴らしが遠くまできれいに開け両側の並木が映えている。この通りの東、国立寄りの一角は、旧来の低い街並みが残り、そこに種々の職種の店舗が入り混じって、なにやら旧街道筋の宿場町のような気配までする。そこには渋い古本屋まであるのだ。今や立川は基地の町の名残を完全に払拭し、みごとに変身したと言えるだろう。

そして市街の中心から少し離れたところに資料館があるのだが、付近にこれほどハイレベルの学問研究の施設をいくつも抱えた都市は稀ではないだろうか。計画が実現するまでに紆余曲折

があったのだろうが、外目にはいきなり誕生したといった趣である。市街の中心の再開発の完成と軌（機）を一にしたというのも偶然とはいえない不思議である。

この立川という素晴らしいコミュニティに欠けているものはなんだろうか。この春、立川市と国立音大の共催でコンサートが初めて開かれた。テーマ、プログラムともよく練られ、演奏も見事、磯山雅さんのレクチャーも行き届いたものであった。私が感銘を受けたのは、渴きがみたされてゆくような聴衆の反応であった。立川でもコンサートはしばしばあるのだが、その客の反応とはちよつと違っていた。しかとは言えないのだが、このコミュニティに欠けているのは、世界に発信するという国文学研究資料館の壮途の根底にある学問研究の野性に関わると思う。この地に降り立って1年、両者の未来に向けての模索をゆっくり始める時期ではなかろうか。



〔当館外観〕



〔当館を含む、立川市の遠景写真〕

書評 国文学研究資料館アーカイブズ研究系編

『近世・近代の地主経営と社会文化環境 —地域名望家アーカイブズの研究—』

福田 千鶴（九州産業大学国際文化学部日本文化学科）

本書は、地域名望家として著名な信濃国高井郡東江部村の山田庄左衛門家を対象として、近世・近代を通じて展開した地主経営、および山田家が地域で果たした社会的・文化的役割とその活動を可能にした環境の解明をめざしたものであり、10年に及ぶ共同研究の成果としてこのたび刊行されたものである。

本書が主に分析の対象とした史料は、山田庄左衛門家に伝来した史料群である。1957年（昭和32）に文部省史料館は伝来文書の一部（穀蔵収納分）の譲渡を山田家からうけていたが、同家にはまだ質蔵、文庫蔵、二間蔵に総計で1万点をこえる文書群が未整理のまま残されていた。

国文学研究資料館史料館（文部省史料館から改組）では、所蔵する山田家文書の目録作成をにらみ、1998年から「史料所在調査」として山田家（長野県中野市）の現地調査に取り組み、中野市教育委員会と協力して『山田家文書目録』3冊を2008年3月までに刊行した（以下、現地史料とする）。

これと平行して史料館所蔵史料（以下、史料館分とする）の整理が進められ、『史料目録第75集・信濃国高井郡東江部村山田庄左衛門家文書』その1（3507点、担当山崎圭、2002年）、『史料目録第80集・同』その2（4016点、担当山崎圭、2005年）、『史料目録第81集・同』その3（3594点、担当青木睦、2006年）、『史料目録第84集・同』その4（3850点、担当青木睦、2007年）を刊行し、総数14,966点に及ぶ史料群の整理を完了させた（その間改組があり、第80集は人間文化研究機構国文学研究資料館アーカイブズ研究系編、第81・84集は人間文化研究機構国文学研究資料館調査収集事業部編）。

その作業のかたわら、2003年度から

2007年度までの4年間にわたり、共同研究『日本近世・近代の地主・名望家文書を中核とした地域資料の総合的研究』（科学研究費補助金基盤研究B、代表丑木幸男）をたちあげ、10数回にわたる研究会を開催して本書の成果へと結びつけてきた。

現地史料と史料館分とをあわせて3万点を超える史料群の整理および保存事業は、地道な作業の積み重ねであり、その過程では並々ならぬ苦労があったことと推察する。まずは、これらの作業に関わったすべての方々の労をねぎらいたい。とくに、原蔵者の山田家のご協力なしにはなしえなかったことであろう。研究面でもご子孫の山田正子氏が科研の研究協力者となり、本書の執筆者の1人に名を連ねていることをここに紹介しておきたい。

*

山田家は武田家の遺臣と伝えられ、近世初期に信濃国高井郡東江部村に土着したという。寛文年間より酒造業を開始し、元禄期には3～5町歩を手作りする質地地主経営を確立した。6代目庄左衛門（松斎）のとき土地集積は最大となり、752石余を所有する大地主に発展した。その松斎は、江戸文人の亀田鵬斎と交流し、信濃地域の文人としても活躍した。明治3年の中野騒動で山田家は焼き討ちにあうが、以後も長野県最大の地主に成長する一方、多くの公職につき、戸長・区長、県議会議員、貴族院議員、衆議院議員、信濃銀行頭取などを同家から輩出した。

このように山田家の歴史をふりかえれば、それは地主制を基盤として豪農から地域名望家へと発展した典型例以外のなにものでもないといえよう。このいわば歴史研究における「古典的」ともいえる素材とテーマに対して、本書では、①新しいアーカイブズ学の展開、②書籍資料論研究など

の進展、③日本近世を中心に近年展開されている地域社会論、という3つの研究課題を設定することで、一つの家・地域のアーカイブズを多角的・総合的に検討し、その地域の文化を含めた社会構造の全体像を解明しようと試みている。

3部13章からなる本書の構成は次の通り。
刊行にあたって「アーカイブズと地域社会」
丑木 幸男

第一部	地主経営論	
第一章	山田庄左衛門家の土地集積と地域・家	神谷 智
第二章	近世後期の山田庄左衛門家をめぐる地主小作関係と村	山崎 圭
第三章	近世山田家の経営と地域的穀物市場	多和田雅保
第四章	近世後期山田庄左衛門家における金融の展開と幕藩権力	戸森麻衣子
第五章	一九二〇年代における長野県大地主の組合製糸経営	横山 憲長
第二部	地域文人論	
第一章	地主文人「山田松斎」の在村漢学と書物出版活動	杉 仁
第二章	信濃文人山田松斎と地域人脈	山田 正子
第三章	北信地域豪農山田家における書画骨董の収集・交易の実態	山田 哲好
第四章	畏三堂須原鉄二と「北信濃の文人」山田家	藤實久美子
第三部	地域社会論	
第一章	近世後期の地主経営と温泉	山本 英二
第二章	一九世紀中葉・在郷商い金紛争とその特質	高橋 実
第三章	町村役場文書の形成と地域史料	丑木 幸男
第四章	「蝦夷地開墾・洋式船舶製造一件往復書簡」をよむ	谷本 晃久
あとがき	高橋 実	

*

各論文の概要や位置づけについては、本書の冒頭で丑木幸男氏が簡潔にまとめておられるのでそちらに譲り、以下ではごく簡単に内容を紹介しておく。

第一部地主経営論に取められた諸論文は、ともすれば従来型の地主制研究のような印象を与えるが、史料学的な分析が踏まえられたことで山田家の地主制の展開および経営の多様な側面が明らかにされている。とくに、山田家の土地集積が「村内から村外へ」と質的变化をとげる画期が享保期にあること（神谷論文）、村議定の作成が引き金となって地主小作関係に対する村の主導権が強まり、山田家が中野役所との関係を深めることで地主支配権の強化をはかること（山崎論文）、「萬差引書出帳」の史料的性格を確定することで、山田家の経営と地域的穀物市場との関係（多和田論文）や近世後期における地主・貸金経営と幕藩権力の強い結びつき（戸森論文）などが明らかにされ、地主経営の一方で製糸経営に参入していく地域名望家の姿（横山論文）が示されるなど、信濃地域の地主経営が多角的に論じられている。

第二部地域文人論は、近年研究が進展しつつある分野である。豪農・地域名望家の文化的活動が具体的な史料分析に基づいて示され、地主制研究と結び付けて論じられた意義は大きいといえよう。とくに地域文人として知られていた山田松齋の研究が大幅に進められた。彼の漢学思想が「徂徠派古学系思索高踏派」と位置づけられ（杉論文）、松齋の生涯から地域文人としての人脈が整理され（山田正子論文）、松齋を中心とした山田家の書画骨董の収集の実態が具体的なデータにより示され（山田哲好論文）、その活動を支える江戸・東京の本屋との関係が明らかにされている（藤實論文）。

第三部地域社会論は日本近世史を中心に議論が深まっている分野である。信濃という地域的特性のなかで地主経営が酒造業から温泉経営へ多角化していく問題をとりあげ（山本論文）、山田家と中野村直助との訴訟一件文書から地域訴訟システムにおける文書主義の浸透を論じ（高橋論文）、山田家が所在する中野村役場文書の形成過程と地域社会の関係を分析

し（丑木論文）、安政3年（1856）に山田家が蝦夷地開墾と洋式船舶の建造に関する出資を越後国出雲崎陣屋附脇野町出張陣屋詰の代官手代から求められるという信濃地域における豪農の役割が提示される（谷本論文）など、山田家の史料を通じて信濃の地域社会像を豊かにする多くの成果が得られたといえよう。

各テーマはいずれもその道の第一人者を招聘して検討された本格的な論文であり、たいへん読みごたえのある内容ばかりである。加えて、論文集がともすれば陥りやすい寄せ集めの印象をまったく与えない。そのことは、次の高橋実氏の「あとがき」を読むと納得させられる。

「科研費による調査・研究は、山田家に伝来した諸史料の調査・研究を通じて、記録史料学、史料学、歴史学、美術史学などの諸分野を総合する調査・研究を実現することが目的であった。なかでも史料調査論・史料保存論などアーカイブズ学研究の成果を駆使し、その方法論を実務の中で点検する作業を通じて、科学的な史料の管理と活用をはかるという問題意識を調査・研究の基盤として共有していた。」

個々の論文の問題関心は別々であっても、アーカイブズ学を研究の基盤として共有するという姿勢に貫かれているからこそ、本書が濃密な共同研究の成果としての迫力を示すことに成功したのだと思われる。

＊

最後に、若干の感想と要望とを述べて、書評の責を終えることにしたい。

本書の優れた研究成果についてはもはや明らかになったと思うが、そのうえであえて欲をいえば、「地域名望家アーカイブズとはなにか」という論稿があってもよかったのではないだろうか。副題にある「地域名望家アーカイブズの研究」とは、本書のなかで「地域名望家史料研究」と置き換えられているように、地域名望家の家に伝来した史料群の研究のことであり、国文学研究資料館アーカイブズ研究系において長年にわたって研究が蓄積されてきたアーカイブズ学をふまえて史料群を分析す

ることと理解できるが、いささか抽象的に過ぎよう。「史料目録第84集」の解題では史料館分の文書群の構造が示されているが、史料館分・現地史料を統合した文書群の構造が具体的に示されていると、読者にも「名望家アーカイブズ」という概念についてイメージする豊かな情報が得られただろうし、今後の研究における新たな課題の発見にもつながったのではないだろうか。

次に、本研究のユニークな点を一言でいえば、「地元の地域研究とのコラボレーション」である。

各地域で貴重な史料群の整理・保存のために目録を作成するという作業は、これまでも続けられてきたし、これからも続けられていくだろう。そうした作業に参加してきた者の1人として常に感じるのは、史料群を整理・保存したあとに地域の歴史像を復元するような総合研究へと発展・昇華させることがたいへん難しいということである。一つの史料群の整理が終われば、また次の史料群の整理へとエネルギーを注ぐように求められるのが地域の現場で史料整理・保存に携わる人々の現状であり、ジレンマでもある。史料を未来に伝えることの意義はわかっているが、利用されないままというのではあまりにも寂しい。

その点で、地元と協同しての山田家の史料群の整理・保存事業にはじまり、その地道な作業を十分に活用して歴史学・アーカイブズ学の研究成果へと発展・昇華させた本書のような共同研究の社会的意義は極めて重いといえよう。10年に及ぶ継続的な研究は、人間文化研究機構という「研究組織」だからこそ可能となる仕事であり、逆にいえば人間文化研究機構のような「研究組織」でなければ難しい仕事ともいえる。

今後も科学的な史料の管理と活用をはかるという立場・姿勢を堅持していただき、地元の地域研究とのコラボレーションを果たしつつ、アーカイブズ学を踏まえた歴史研究の成果を示すという社会的役割を果たし続けてほしい、と強く願うものである。

（名著出版 2008年12月 433頁）

プロジェクト発表会から

「御夢想の連歌と御夢想の肖像画 —家光の家康追慕—」

入口 敦志（文学資源研究系 助教）

■一、はじめに

日本文学の古典には、伝統的に夢想の連歌というものがある。まず簡単な定義を『日本国語大辞典』によってみておこう。

【夢想の連歌】夢で歌や句を得た時、それを神仏のお告げだとみて、神仏への奉謝のために作る連歌。懐紙に「夢想連歌」あるいは「夢想之連歌」と端作りして脇句から始め、九九句を付け、夢の句が短句もしくは歌一首の場合は一〇〇句付ける。夢想連歌。夢想開連歌。

これによってわかるように、夢とは神仏や異界と人をつなぐものと認識されていた。神仏のお告げであったり、何らかの予兆であるというのが夢の持つ意味である。

本報告では、徳川家光の夢に注目する。家光には、夢想の連歌や、夢に現れた祖父家康の肖像画を描かせるなど、夢とかかわる多くの記録が残っている。それらを取りあげるとともに、夢をどのように表現したのかということを考えてみたい。

■二、御夢想の連歌

毎年正月二十日、江戸城においては佳例の柳営連歌会が開催されていた。しかし、家光の時代になると、それ以外にも御夢想の連歌が頻繁に行われる。その一つの例を見てみよう。

○十七日紅葉山 御宮に参らせたまふ。尾紀水三卿陪拜。諸大名予参供奉例のごとし。御太刀は堀田加賀守正盛、御刀は御側久世大和守広之役す。この日二丸にならせられ猿樂あり。内宮の御供所にて御夢想の連歌興行し給ふ。このほど夢に見給ひし句は、松が枝に花の咲けるあした哉。これに霞を分て出るもろ鶴という御句を付給ふ。第三は大

僧正天海、世々の春浜の真砂やかすならんと付て、遂に百韻満吟ありて 神前へ納めらる。『大猷院殿御実紀』これは寛永十九年（1642）一月の徳川実紀の記事である。家康命日の十七日に江戸城内東照社に参詣。その前に御夢想を得た発句に家光自身が脇句を付け、第三を天海が勤めた。「もろ鶴」とは、五年前の寛永十四年（1637）四月五日、二の丸東照社造営予定地に降り立った二羽の鶴を指す。家光はこの二羽の鶴を吉祥と見なし、家康と自分とに重ね合わせていたようで、当時制作途中だった仮名本『東照社縁起』に、二羽の鶴が飛来した場面をわざわざ付け加えさせてもいる。

同様の御夢想連歌はこの一度だけではない。前年、寛永十八年（1641）のやはり正月十七日にも御夢想の連歌が行われている。十七日は家康の命日で、この御夢想連歌も家康と何らかの関係があったものであろう。

また、寛永十六年（1639）十一月五日には「呉竹の代々を重ねて庭の面に色もかはらぬ世の久しさは」という和歌を夢に得て、御夢想連歌の興行を行っている。この時は吉良義冬を日光に代参させて、御夢想連歌と大刀を家康神前に奉納。このように、家光の御夢想連歌は、亡き家康との交流の場となっていたようにみえる。夢は神仏や異界と人をつなぐと最初に確認したが、まさにそのとおりに機能していることがよくわかる。

正月二十日の柳営連歌会でさえ、寛永十五年（1638）以降は、先にふれた二の丸東照社の祭祀にたずさわる浅草寺観音院（現在の伝法院）忠尊らを御連衆に加え、しかも第三という重要な役割を与えるなど、明らかに東照社祭祀の意味合いを加えているのである。御夢想の連歌も

すべて寛永十六年（1639）以降であることから、この頃から家光の東照大権現家康思慕の念が、それまで以上に高まったと考えざるをえない。

そのことは、御夢想の肖像画の制作からも伺うことができる。

■三、御夢想の肖像画

御夢想は連歌だけではなく。家光は寛永十六年（1639）以降、家康の夢をしきりに見ており、夢に現れた姿を狩野探幽等に命じて描かせている。これらについては、曾根原理氏が『神君家康の誕生』（吉川弘文館、2008年）において集約しているが、それによると、寛永十六年から慶安元年（1648）までの十年間に、十七点の御夢想の肖像画が確認されている。寛永以前には、元和九年（1628）に一点と年次不明のものが一点あるのみ。ここでも御夢想の連歌同様、寛永十六年以降に集中していることは注目すべきであろう。やはり、この年代に家光の家康思慕の情が非常に高まっていたことを示しているといえる。

さて、その御夢想の肖像画には特徴がある。その点について以下、具体的に見てみたい。



【東照権現像 狩野探幽筆】
（日光山 輪王寺 宝物殿蔵）

上の図は、家光の御夢想によって描かれた家康の像のひとつで、他の肖像画も同様の特徴をもっている。それは、神像として描かれているということで、縹緗緑の

上げ畳を敷き、前には狛犬が一對据えられている。上部には唐破風をもつ廂が描かれており、その下には帷と御簾が掲げられ、宮に祀られた神の姿である。このように宮に収まる（以下私に「宮入り」と呼ぶ）肖像画は多くはない。私が確認できたものでは、「聖徳太子勝鬘經講義図」があるが、これは聖徳太子の肖像画というよりも、聖徳太子伝中の著名な場面を切り取って一枚の絵に仕上げたものであり、物語絵に属するものと考えてよいだろう。ただし、聖徳太子には他にも宮入の肖像画が何種類かある。もう一つは、よく知られたものであるが、宝冠を被り、法衣をまとった後醍醐天皇の肖像画（清浄光院蔵）である。右手に三鈷杵、左手には三鈷鈴を持つ。下部には格狭間の中に獅子を描いた台がありその上に縹緗縁の上げ畳を敷いて座っている。上部には掲げられた帷。このような例はあまり見当たらず、後醍醐天皇のこの肖像画はかなり特異なものと考えられている。

室町末から宮入の例が散見されるようになる。有名な例では、高台寺に所蔵される豊臣秀吉の肖像画（甲本、乙本）が同様の宮入りのかたちで描かれており、秀吉の弟豊臣秀長（禅林寺蔵）・養子にもなった小早川秀秋（高台寺蔵）など豊臣氏の一族にはこの形式をとるものが多い。室町末期、いわゆる桃山時代に高貴な武家を神像として描く場合に用いられるようになったと考えてよいだろう。他に天蓋などを描き込むもの、やはり室町末から見られるようになる。

家康の像で注目したいのは、この肖像画の上下に雲が描かれていることである。雲・霞を以て画面の上下を縁取りし、また、場面などを区切るのには日本の絵巻物や障屏画に伝統的に用いられてきた手法であり、決して珍しいものではない。しかし、肖像画ということになると、珍しく、秀吉の宮入の肖像画の一部に用いられている他は、ほとんど見ることがないといって良い。既に述べた聖徳太子や後醍醐天皇の宮入の肖像画にも雲や霞は描かれることはな

く、建物に付随して雲や霞が描かれているのではないことは間違いないだろう。では、何故家康の肖像画には雲・霞が描かれるのか。

中国では夢を吹き出しの形に描く。元以前の吹き出しの夢はまだ見たことはなく、元代・明代の版本の挿絵には数多く現れてくるようになるので、その頃に多用されるようになったものと思われる。日本への伝播は、土谷真紀氏の指摘（『釈迦堂縁起絵巻』をめぐって一考察、『美術史』163号、2007年）する明版『釈氏源流』の影響を受けた『釈迦堂縁起絵巻』（伝狩野元信筆、永正十二年（1515）頃か）中の下天托胎の場面が古いものといえそうである。下天托胎とは、摩耶夫人が白像が胎内に入る夢を見て釈迦を身ごもったという話。ちなみに、古代インド、ガンダーラなどの石彫では、像は円の中に描かれる。また、敦煌や元以前の絵画では、特に夢のしるしを描くことはないようである。

さて、既にふれた『東照社縁起』においても吹き出し型の夢が使われている。冒頭部分、三河鳳来寺の薬師如来に子を授けてくれるように祈願した家康生母、お大の方（伝通院）が、薬師如来來迎の靈夢を見た。その夢を吹き出しによって表現しているのである。狩野探幽は、『東照社縁起』を描くために、方々から手本となる絵巻類を集めており、その中に『釈迦堂縁起』を模倣したものとなる。山王一実神道によって家康の本地仏は薬師如来とされており、それを受けて釈迦伝の下天托胎説話を採り入れたことは明かである。

ところが、この下天托胎における吹き出し型の夢は、広範囲に影響を与えた形跡が見えない。私見では、むしろ明版や秀頼版（1606年刊）『帝鑑図説』中、「夢寶良弼」の図の方が影響力が大きかったのではないかと考えているが、この点については、紙幅の都合もあり、あらためて考察したい。

ここで、確認しておきたいのは、吹き出しの形である。中国の版本や絵画では、夢の吹き出しは雲形に描かれることはない。

ところが、『釈迦堂縁起絵巻』や『東照社縁起』においては、吹き出して広がっていった先が雲のようにになっている。これは日本での特徴といってよいであろう。

例として、狩野山楽筆の帝鑑図屏風を奈良絵風に写した屏風から「夢寶良弼」の絵をあげておく。



【帝鑑図屏風 六曲一双 部分】

中国の絵画では、夢の吹き出しは、夢とそれ以外の現実とを区切る描線としてはたらいっているのだが、日本の絵画では、夢の内容は雲の中、あるいは雲の上に表現され、必ずしも現実と区別するようには出来ていない。これは、まったく説明なしに人物の枕頭に夢の内容が描かれるといった日本の伝統的夢の描法と、神仏が雲に乗って示現する描法とに由来するものでもあろう。

いずれにせよ、探幽は夢を雲形の中に描き込んでいるのである。

そこで、もう一度家光御夢の家康肖像画にもどってみると、その上下に描かれた雲の意味が見えてこないだろうか。つまり、この雲は家光の夢の中での情景であることを示唆していると考えるのである。

更に想像をたくましくすれば、秀吉肖像画のうち、上下に雲・霞が描かれるものも、靈夢と関わるのではないだろうか。家光が家康を慕って夢を見たように、秀頼も秀吉を慕って夢を見ることはなかっただろうか。

※本稿は、2009年3月4日第4回インド日本文学会「日本文学に見られる夢と幻想の世界」（於、デリー、国際交流基金）において発表したものの一部に、加筆したものである。

人間文化研究機構連携展示

「百鬼夜行の世界」

小林 健二（文学資源研究系 教授）
 齋藤真麻理（文学形成研究系 准教授）
 江戸 英雄（文学形成研究系 助教）

【連携展示の趣旨】

近年、妖怪の物語や絵画が人々の注目を集め、学際的な妖怪文化研究が進展を遂げています。その背景には、想像力の文化や精神世界への深い関心があるのではないのでしょうか。

人間文化研究機構の各機関においても、早くから怪異・妖怪に関する共同研究が行われています。それぞれ関連資料の収集に尽力しつつ、研究成果の社会的還元にも力を入れて参りました。

妖怪を描いた作品は数多く残っていますが、とりわけ「百鬼夜行絵巻」は、後世に影響を与え続けた名作に挙げることができます。今回はこの「百鬼夜行」に焦点を絞り、妖怪文化研究の第一人者、小松和彦氏（国際日本文化研究センター教授）を展示プロジェクト委員長に迎え、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センターによる連携展示を企画しました。

「百鬼夜行」とは、真夜中の都の大路を異形たちが群行する様子をあらわす言葉です。『今昔物語集』をはじめとする多くの書物に、鬼たちが夜行・群行する説話を書き留められています。彼らは牛馬のような頭をしていたなど、様々な姿が記されています。

室町時代になると、異形の行列は「百鬼夜行絵巻」として絵画化されました。そこに描かれたのは、動物や魚介、道具など、かつての百鬼夜行とは姿かたちが大きく異なる異形たちでした。百鬼夜行の世界に変容が起こったのだともいえます。最も有名な真珠庵本「百鬼夜行絵巻」では、琴や琵琶、鉞といった「道具」の妖怪行列として表現されています。そして、この絵巻は次々に書き写され、後に大きな影響を与えることとなりました。

江戸時代、真珠庵本「百鬼夜行絵巻」に描かれていた妖怪たちは、一人歩きを始めます。彼らは絵巻を抜け出し、絵本の挿絵や浮世絵、日用品の装飾にいたるまで、多種多様な作品に足跡を残していきました。図柄を大幅に組み替えた妖怪行列絵巻も、江戸時代に生み出されたものです。

躍動感あふれる「百鬼夜行」の世界は、いつどのようにして生まれ、どのように伝えられていったのか—その謎解きを試みて、国文学研究資料館の会場では、絵画資料のみならず文芸作品にも目を向け、「百鬼夜行」の誕生と、後世の多様な展開を探ってみたいと思います。国立歴史民俗博物館の会場では、代表的な「百鬼夜行絵巻」の数々を展示し、絵巻の系譜をたどります。

今なお人々を惹きつけてやまない、「妖怪 NIGHT PARADE」の世界を楽しんでいただけたら幸いです。（齋藤）

【展示資料の紹介】

当連携展示では、《百鬼夜行》という特定のコンセプトに基づいた四つのテーマ構成をお楽しみいただくよう、人間文化研究機構の国立歴史民俗博物館や国際日本文化研究センター、また、諸機関より多数のご協力をいただき、貴重な資料を展示しています。

最初に、展示資料を構成するに当たり、下記の諸機関よりご協力いただいたことを明記して感謝の意を表しておきます。

大倉集古館
 京都市立芸術大学芸術資料館
 真田宝物館
 東京都立中央図書館
 西尾市岩瀬文庫
 明治大学図書館
 次に展示資料をテーマごとに列記しま

す。展示資料名の後に所蔵先を記していない展示資料は、当館が所蔵する資料です。

I 百鬼夜行絵巻

百鬼夜行図屏風（大蔵集古館）
 百鬼夜行絵巻（国立歴史民俗博物館・国際日本文化研究センター・大蔵集古館）

II 百鬼に出会う・避ける

理斎随筆
 今昔物語
 栄花物語
 宇治拾遺物語
 The Old Man & The Devil
 El viejp y los demonios/
 エスパダ訳
 袋草紙
 拾芥抄
 大鏡
 江談抄
 宝物集
 土蜘蛛草紙絵巻（国際日本文化研究センター）
 田原藤太秀郷（国際日本文化研究センター）
 大黒舞
 陰陽師と式神・外道（復元模型）（国立歴史民俗博物館）

III 百鬼の行列

百鬼夜行絵巻（真田宝物館）
 付喪神絵詞（京都市立芸術大学芸術資料館）
 化物婚礼絵巻（国際日本文化研究センター）
 百鬼夜行之図（西尾市岩瀬文庫）
 晩斎鈍画
 晩斎百鬼画談（国立歴史民俗博物館）

IV 描き継がれた百鬼

滑稽百鬼夜行絵（国際日本文化研究センター）
 百器徒然袋（西尾市岩瀬文庫）
 百鬼徒然袋（国立歴史民俗博物館）
 善知安方忠義伝（明治大学図書館）
 志道軒往古講釈（東京都立中央図

書館)

狂画苑 (国立歴史民俗博物館)

古唐櫃をこじ開け妖怪たちを解き放

つ鬼 (国際日本文化研究センター)

錦絵 百器夜行 (国立歴史民俗博物館)

後鳥羽法皇の夢中に現れる妖怪の
図 (国立歴史民俗博物館)

画本西遊記百鬼夜行ノ図 (国立歴史民俗博物館)

なお、上記の展示資料に加えて、国立歴史民俗博物館に展示しています国際日本文化研究センター蔵百鬼ノ図、国立歴史民俗博物館蔵狩野洞雲筆本百鬼夜行図を、国立歴史民俗博物館が製作した大画面のタッチパネルシステムにより、自在にご覧いただけます。

さて、当館所蔵の展示資料のうち、特に貴重書等の指定を受けた資料を紹介しますと、まずは室町物語の『大黒舞』を挙げることになります(表紙絵参照)。昔話「藁しべ長者」と言えば誰でもよくご存知の、庶民の立身出世を語った、たいへんおめでたい祝儀物です。

この物語の絵巻は、鎌倉市の英勝寺等に伝わっていますが、当館には、岩波書店の新日本古典文学大系の底本に選定された、近世前期写の絵巻2巻があります。

次に、同じく新日本古典文学大系の底本に選定された、『江談抄』1冊を挙げたいと思います。『江談抄』は、院政期の鴻儒大江匡房の言談を藤原実兼が筆録したのですが、その伝本は、問答の形式をよく留めた古本系と、古本系の本を内容により分類配列し直した類聚本系とに大別されます。当連携展示では、三条西家文書中の1冊で、三条西公枝自筆本を子孫の公福が享保20年(1735)に書写した類聚本系の写本をご覧いただきます。

当館では、これら2点を含む13点の当館所蔵の資料に、諸機関の資料を合わせ、全36点の資料(復元模型を含む)を展示し、「百鬼夜行の世界」を充分に楽しめいただけますよう展示場を工夫し

ています。

ここでその工夫の一端を紹介すると、当館の展示資料の一部は、「百鬼夜行」の説話を収載する資料と、「百鬼夜行絵巻」と同様の図様を持つ資料とで構成しています。当館では、それら「百鬼夜行絵巻」成立の謎に迫る資料を、季節柄、怖い物見たさをもそるよう、ではなくて、安心して楽しくご覧いただくよう陳列しています。

また、仏造って魂を入れず、とは相手が妖怪なので申せませんが、中世までの「百鬼夜行」は、ある定まった方法で避けなければならない禁忌の対象でした。絵巻として「百鬼夜行」が図様化されると、以後はその「百鬼」の図様が多種多様に「妖怪」化されて発展していくようであり、「百鬼(夜行)」の図が多数描かれ、読本の挿絵の素材としても用いられるようになってきます。当連携展示では、その展開をもご覧いただくために、人間文化研究機構の諸機関のデータベースを統合検索する資源共有化事業の成果も活用し、多数の資料を、諸機関のご協力により、用意しています。

なお、個々の展示資料については、場内のパネル解説と、展示図録『百鬼夜行の世界』(人間文化研究機構編 角川学芸出版発行)に詳述していますので、是非ともご覧ください。

近年は妖怪ブームと言われています。禁断の封印を何者かが解いた、あるいは解こうとしているのでしょうか。しばしば、妖怪たちの世界は人間文化の裏返しである、と言われますが、当連携展示「百鬼夜行の世界」では、目に見えないおどろおどろしい妖怪たちの世界とは一線を画し、中世以降に数多く製作された《百鬼夜行絵巻》を中心にその世界を、楽しくご覧いただくよう企画しています。

以上、甚だ簡単ですが、当連携展示「百鬼夜行」を開催するに当たり、これをもって、研究企画の報告、ならびにご案内とします。

当連携展示プロジェクト委員会委員ならびに当館の教職員一同、みなさまのご来場を、心よりお待ちしております。(江戸)

【シンポジウム】

連携展示に先立ちまして、「百鬼夜行の世界」をめぐる人間文化研究機構主催のシンポジウムが開催されます。日時は、7月11日(土曜日)の13時から17時まで。会場は、有楽町の朝日ホール(東京都千代田区有楽町2-5-1)です。

シンポジウムの内容は、まず連携展示の代表者である小松和彦氏が「妖怪絵巻誕生の謎を解く」という題で基調講演をされます。その後で、若杉準治氏(京都国立博物館列品管理室長)が美術史研究の立場から、徳田和夫氏(学習院女子大学教授)が国文学研究の立場から、山田奨治氏(国際日本文化研究センター准教授)が情報学研究の立場から、それぞれテーマにそった報告をしていただきます。さらに、以上の講演者と報告者の四人に、香川雅信氏(兵庫県立歴史博物館学芸員)と小林健二(国文学研究資料館教授)がコメンテーターとして加わり、パネルディスカッションを繰り広げます。司会は、これも妖怪研究のスペシャリストである常光徹氏(国立歴史民俗博物館副館長)が行います。

メンバーのほとんどが連携展示に関わった者で、妖怪研究に関して一家言ある方たちですから、百鬼夜行の世界はもとより、それにとどまらない妖怪談義に花が咲くことでしょう。展示をご覧になる前に、どうぞこちらにもお運び下さい。(小林)

国文学研究資料館 特別展示

「江戸の長編読みもの 一読本・実録・人情本」の予告

大高 洋司（文学資源研究系 教授）

本年度特別展示の一環として、9月25日（金）～10月23日（金）のほぼ1ヶ月間、「近世後期小説」（主として19世紀前半に広く親しまれた娯楽小説）のうち、草双紙など絵を見ることが中心となる〈絵本〉に対して、文章を読み、筋を追うことを中心とする長編読みもの類の展示を開催する（会場は国文学研究資料館展示室）。展示を担うのは、平成16年度から国文研プロジェクト研究「近世後期小説の様式的把握のための基礎研究」に取り組んできた、20名を超える第一線研究者から成るチームのメンバーである。

このプロジェクトは、19世紀のみならず、江戸時代を通じて最も高い完成度をもつと言われる読本の小説様式がどのように形成されたかの検討を中心に、写本で流布した実録体小説（実録）が〈読本様式〉にどのように関与したか、また、読本の一つである〈中本もの（中本型読本）〉から派生した人情本が、どのようにして独自の様式をもつに至ったのかについて共同研究を推進し、並行して実施した平成17～20年度科学研究費補助金による共同研究「近世後期江戸・上方小説における相互交流の研究」と連動して、研究内容を一層補強してきた。

なお国文研では、平成15年秋に「江戸市立図書館所蔵『読本』展」を開催しているが、今回の展示は、この展示が大きなきっかけとなって発足したプロジェクトの成果報告として改めて企画し、研究を支えた国文研・江戸所蔵の原典資料類を中心にテーマに沿ったできるだけ良質な版本・写本を選んで行うものである。

前回の展示を通じて江戸本の美しさをご記憶下さっている方にも、また初めてご覧いただく方にも、当時全国規模で様々な階層の人々に親しまれた「江戸の長編

読み物」の魅力を、ぜひ堪能していただきたいものと考えている。

全体はⅢ部7コーナーで構成。まず「導入〈よみほん〉とは?」。「1. 馬琴の長編〈史伝もの〉読本」として、〈読本〉ジャンルのうち最も良く知られた曲亭馬琴の『椿説弓張月』（江戸市立図書館蔵）・『南総里見八犬伝』（国文学研究資料館蔵）に加え、袋（販売の際本をくるむ）が帙に添付された『新局玉石童子訓』（国文研）の善本と共に、〈読本〉に対する〈絵本〉の代表として馬琴作の合巻『新編金瓶梅』の板本を展示する。

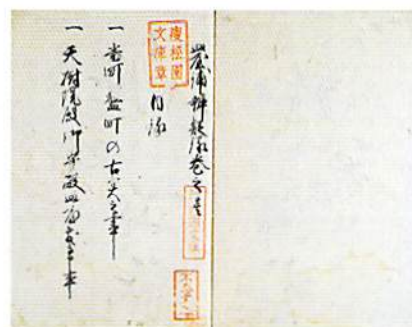


【玉石童子訓】

「第1部 読本の父母と親族」。

ここでは〈読本〉の発生に大きな役割を果たした様々な先行作品を紹介する。「2. 読本のゆりかご」のコーナーでは、初期読本の代表作として上田秋成『雨月物語』（国文研）、中国白話小説『水滸伝』とその翻訳、翻案作である建部綾足『本朝水滸伝』（国文研）など。実録の代表として『皿屋敷弁疑録』（国文研、不忍文庫（屋代弘賢）・阿波国文庫（蜂須賀家）旧蔵）、街談巷説を和文小説に仕組んだ綾足『西山物語』（国文研、馬琴旧蔵）、また、貴重な

『絵本忠臣蔵』初印本（江戸）と関連実録、及び祐天上人をめぐる実録・読本など。



【皿屋敷弁疑録】

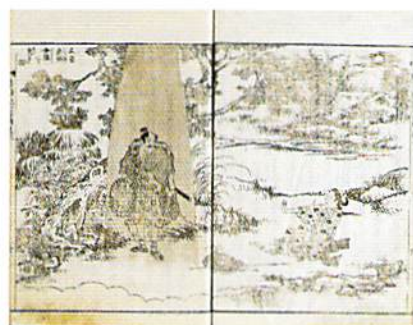
「3. 〈中本もの〉読本と人情本」は、読本の「親族」として、これまで正面から取り上げられることのきわめて稀だった文政期（1818～29）人情本の優品を紹介しており、今回の展示で特に注目していただきたいコーナーである。展示資料は、ジャンルそのものの発生を告げる『清談峰初花』とその種本である写本『江戸紫』を皮切りに、後に為永春水と名乗る二世南仙笑楚満人の『明烏後の正夢』、またこの時期のもう一人の代表的作者鼻山人の『傾城肝粒志』（国文研）、稀観本『梓物語』など。



【傾城肝粒志】

本プロジェクトでは、3と共にこれまでさほど注目されて来なかった「4. 〈絵本もの〉読本」の掘り起こしに力を入れた。次項〈稗史もの〉読本（京

伝・馬琴に代表される、優れた小説性をもつ読本)に先だって上方・江戸に流布し、多くの読者を得て、長い生命を保ったのではないかと思われる。名著『都名所図会』の編者で、京阪の書肆・作者が〈絵本もの〉読本を考案の際、その基本的な型を模倣されたことをきっかけに、自らも〈図会もの〉作者に転身した秋里籬島の作品、〈絵本もの〉の代表作者である京都の速水春暁斎、大坂の岡田玉山、江戸の高井蘭山の作品を、残存率のきわめて低い初印本(初刷)摺本。読本の初印本は300部程度。後印本(後刷本)に比べてずっと入念に刷られ、テキストとして価値が高い)で紹介する。ことに〈絵本もの〉の代表作『絵本太閤記』の展示本(国文研)は、第一級の善本。



【絵本太閤記】

「第Ⅱ部 読本の自立と普及-娯楽長編読みものの王者へ-」。

ここでは、先行する〈中本もの〉・〈絵本もの〉を意識しながら江戸で様式の確立した〈稗史もの〉読本と、江戸〈稗史もの〉の影響を受けながらも独自の色合いを失わなかった上方〈稗史もの〉読本を、豊富に紹介する。

「5. 山東京伝と〈稗史もの〉読本様式の確立」では、〈稗史もの〉読本の基本型を定めた山東京伝の作を中心に展示する。『忠臣水滸伝』(国文研)は〈稗史もの〉の初作として知られているが、展示本は前後編の題簽のほぼ完備した有数の善本と言って良い。その他、

『櫻姫全伝曙草紙』・『善知安方忠義伝』に至る数点を、原本とパネルで紹介する。



【忠臣水滸伝】

「6. 曲亭馬琴と〈稗史もの〉読本の流行」では、京伝と共に〈稗史もの〉読本の確立に尽力し、代表作者に成長した曲亭馬琴を中心に、爆発的な流行を見た最盛期の江戸〈稗史もの〉を紹介する。馬琴以外には、京伝・柳亭種彦・振鷺亭・石川雅望・鳥亭焉馬・小枝繁の作。種彦は京伝・馬琴に追隨して読本に手を染めたばかり。振鷺亭にも京伝の影響が著しい。雅望・焉馬は京伝・馬琴より年長の作者だが、国学者・歌舞伎通としての蓄えが独自の作風を形作っている。



【千代義姫七変化物語】

(振鷺亭)

小枝繁は武士作者で、活躍期の長い人。『小栗外伝』(八戸)は、画工葛飾北斎の技量も素晴らしい。晩年の『玉姫露』(国文研)は初印の面影を良く留めた美本。



【玉姫露】

「7. 上方〈稗史もの〉読本の再評価」は、従来江戸〈稗史もの〉の亜流とのみ目されて来た上方〈稗史もの〉を、文字通り再評価する試み。これも本プロジェクトの成果のひとつで、八戸市立図書館に善本が多数所蔵されていたからこそできたことでもある。今回は、八戸本のうち、稀本の『朝顔日記』、発想において『八犬伝』に先んじた『竹箆太郎』をはじめ、江戸〈稗史もの〉の影響が見られる作、また典拠となった実録が判明した作を展示した。

以上7つのコーナーについて、簡略に紹介した。研究が最も進み、またプロジェクトの成果出版物として『読本【よみほん】事典 江戸の伝奇小説』(笠間書院、2008年)のある読本中心の組み立てだが、内容の面白さに比べて装丁の地味な写本の実録を読本と並べて見ていただくことを心がけた(読本はこんなにも実録を栄養にしているのである)。また未来に向けての研究課題である文政期人情本についても、ぜひ多くの方の視線に触れてほしいと願っている(プロジェクトでは、展示に向けて『人情本事典(仮題)』を鋭意編集集中)。

なお、展示資料は前期・後期各2週間程度で入れ替えの予定。またこの「予告」は準備期間中のものなので、実際の展示の際には多少変更があるかもしれないが、それも意欲の表れとご理解いただければ幸甚である。

コロンビア大学東アジア言語文化学部との学術交流協定の締結

当館では、日本文学研究の国際的拠点として、海外の研究機関及び研究者との多様な学術交流事業を積極的に進めています。

その一環として、今年2月にコロンビア大学東アジア言語文化学部（アメリカ合衆国）と学術交流協定を締結しました。

今後、研究者の招聘・派遣による相互交流、国際研究集会の開催を中心に共同調査、共同研究の実施等を行っていく予定です。



コロンビア大学東アジア言語文化学部との学術交流協定

第2回日本古典文学学術賞受賞者決定

第2回日本古典文学学術賞は、平成20年1月～平成20年12月に出された研究業績について、当館賛助会に設置されている日本古典文学学術賞選考委員会における選考の結果、次のとおり決定しました。

○岡崎 真紀子（静岡大学人文学部准教授）

研究業績 『やまとことば表現論－源俊賴へ』 笠間書院 2008年12月

○恋田 知子（国際仏教学大学院大学学術フロンティア研究員）

研究業績 『仏と女の室町－物語草子論』 笠間書院 2008年2月

連携展示「百鬼夜行の世界」の開催

【研究ノート】P7～P8で紹介いたしました、人間文化研究機構連携展示「百鬼夜行の世界」は以下のとおり開催いたします。本展示は、当館と国立歴史民俗博物館で二会場同時開催いたします。

■開催期間

2009年7月18日（土）～8月30日（日） ※休館日は、会場によって異なります。

■開催場所

国文学研究資料館 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 <http://www.nijl.ac.jp>

お問い合わせ 050-5533-2900（代） 9:00～17:45

休館日：7月19日・20日・26日、8月2日・9日・10日・16日・23日

開館時間：10:00～16:30（入館は閉館30分前まで）

入館料：一般300円／高校生以下無料

国立歴史民俗博物館 〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117 <http://www.rekihaku.ac.jp>

お問い合わせ 03-5777-8600 NTTハローダイヤル 8:00～22:00

休館日：7月21日・27日、8月3日・17日・24日

開館時間：9:00～17:00（入館は閉館30分前まで）

入館料：一般420（350）円／高校生・大学生250（200）円／小・中学生無料

（ ）内は20以上の団体※毎週土曜日は、高校生の入館が無料です。

平成 21 年度連続講演

平成 21 年度の国文学研究資料館連続講演は、法政大学名誉教授・表章先生を講師にお迎えし、^{おもてし}「表氏八十以後能楽談儀 ―能楽研究百年史の争点を洗う―」という題で、能楽をテーマに行います。

開催日と内容は以下の通りです。

- 第 1 回 10 月 26 日 (月) 『花伝』成立論と世子用字法探索と ―世阿弥能楽論研究の進展と課題―
- 第 2 回 11 月 9 日 (月) 作者研究と作品研究の流れ ―小段理論・古注の活用・作品史など―
- 第 3 回 11 月 30 日 (月) 観世信光と金春禅鳳 ―室町後期の新しい動き―
- 第 4 回 12 月 7 日 (月) 徳川綱吉・家宣の功罪 ―大混乱の中の新傾向―
- 第 5 回 12 月 21 日 (月) 「座」「流」と「大夫」「家元」 ―能楽史研究の動向と展望―

各回とも時間は午後 2 時 30 分～4 時、場所は国文学研究資料館(立川総合研究棟) 2 階大会議室です。

聴講を希望される方は、9 月 18 日 (金) までに往復はがきに住所・氏名を御記入の上、〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3 国文学研究資料館「連続講演」係へお申し込みください。応募者多数の場合は抽選を行います。なお、聴講料は無料です。

また、連続講演に合わせて 12 月 7 日 (月)～25 日 (金) の日程で、能楽に関するさまざまな資料を集めた展示を開催する予定です(詳細は次号でお知らせします)。(落合博志)



〔昨年度の講演の様子(狩衣着付実演)〕

第 33 回国際日本文学研究集会の開催

国文学研究資料館主催の第 33 回国際日本文学研究集会は、平成 21 年 11 月 28 日 (土)～29 日 (日) の二日間にわたり開催することになりました。この研究集会は海外における日本文学研究者との交流、国内に滞在する留学生の支援を目指して、1977 年に発足したもので、今年も国内外の応募から選出された十数名の研究発表とポスターセッション発表が予定されています。今回のテーマは「語られる人称・なぞらえる視点」、4 月から研究発表の募集が始まっています。参加申込をされる方には事前に日本語と英語の要旨集をお送りさせていただきます。なお、今年から、研究発表の応募と参加の申込は Email での受付も可能となり、詳しいことは、当館のホームページ (<http://www.nijl.ac.jp/contents/events/index.html>) を御覧ください。(陳 捷)



〔昨年度の会場の様子〕①



〔昨年度の会場の様子〕②

新収資料紹介 ①

【雄本八種 刊 8冊】〔当館貴重書 99-124〕

赤豆本ともいう。8巻8冊。縦5.3×横3.6cm。表紙は丹色無地。8冊のうち、2冊（『福神あづくし』『八嶋』）に享保8年正月、2冊（『四天王の始』『おくりの（判官）』）に同9年正月の刊記あり、どちらも山本九左衛門板。8冊の書名は以下の通り。『四天王の始』、『三世二河白道』、『福神あづくし』、『おくりの（判官）』、『鳥つくし』、『八嶋』、『職人尽』（仮題）、『月ごとの行事』（仮題）。なお、『落穂ひろい』（瀬田貞二）によると、赤豆本で現存するのは、享保8、9年刊山本九左衛門板のもののみである。当館蔵本以外では、天理図書館に所蔵される『もも太郎』、『舌切雀』、『とりをひ』『きん平大力』『びじん』がある。



新収資料紹介 ②

【巷間芸能絵尽 写 1帖】〔当館貴重書 99-128〕

巷間芸能 22種の絵を張り込んだ画帖。縦10.7cm×横15.2cmの折り帖に団扇形に切り取った絵が貼り込まれている。描かれている風俗は17世紀中葉ころのものと思われ、絵の成立も元禄前半を下らないだろう。万歳、えびす舞わし、せきざろ、地黄煎売り、蓮飛び、あやおり、枕かえし、放下、八挺鐘、ことぶれ、門だんぎ、茶筌売り、唐人踊り、猿若、鉦たたき、歌舞伎若衆、門説経、黒木売り、盲僧、勧進聖などの芸態を知ることができる稀少な資料である。細密に彩色された絵は、絵画史の観点からも注目されよう。



総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

4月9日（木）に総合研究大学院大学本部のある神奈川県葉山キャンパスで入学式が行われました。今年度の本専攻入学者は3人。祝福の荘厳なピアノ演奏で始まり、厳粛に執り行われました。その後、新入生を歓迎するセミナーも行われて、緊張感漲る博士課程の生活がスタートしました。

その新入生を迎えて、日本文学研究専攻のある国文学研究資料館では、13日（月）にオリエンテーションが行われました。実際の生活のスタートに即して、教員や授業の話などが行われ、先輩からも有意義な情報を得ました。

奨学金や授業料の減免など、何を申請するにも必ず必要になる研究業績は、倦まず弛まず蓄積しなければなりません。その中に高く評価される輝く論文も混じってくる。普通はそういうふうに進んでいくのだと思います。頑張ってください。（中村康夫）



入学式の模様



今年入学した 吉田小百合 佐々木比佐子 江崎公子の3氏

サテライト講座の開催

平成20年に当館は立川市に移転し、講演会等の催し物を当館の会場で行ってきましたが、このたび、立川市を離れ、都心の会場で当館の教員が講座を行う、サテライト講座を開催します。詳細については当館ホームページにて今後お知らせいたします。是非、ご参加ください。

日 時：平成21年11月14日（土）

講 師：今西 祐一郎（国文学研究資料館長）

テーマ：「平安朝文学への招待」

中村 康夫（国文学研究資料館 文学形成研究系教授）

日 時：東京堂神保町第1ビルディング（予定）

表紙絵紹介

大黒舞〈だいこくまい〉

江戸時代前期に描かれた御伽草子。立身出世と福神信仰を題材とする、めでたづくしの物語。大和国吉野の里に住む大悦の助は、たいへん親孝行な人であった。彼は京都清水寺に参詣した折に観音菩薩のお告げによってわらしべを拾うが、それは梨の実から衣、馬、黄金へと次々に交換されてゆき、思いがけない福徳を手にとることとなった。屋敷には、福をもたらす大黒や恵比寿が家来をつれて訪ねてきた。そのなかには、『百鬼夜行絵巻』の妖怪とよく似た者もいた。一同は賑やかな宴を催し、舞や相撲を楽しむ。そこへ盗賊が押し寄せるが、福神たちは小槌や釣り竿でみごとに彼らを追い払い、うわさは朝廷まで届いた。大悦の助は中納言の姫君をむかえて栄えたという。物語は、「その後は年を数へ月を増し、日を重ねて子孫繁昌し給う程に、門外に人満ちて輿、車の立て処もなし。まして肩を並ぶ人なくして、栄へ給ふぞめでたき」と結ばれる。本書は岩波新日本古典文学大系『室町物語集』下に全文と挿絵とが紹介されている。（齋藤真麻理）



● デジタル画像を公開

「マイクロ/デジタル資料・和古書所蔵目録」から館蔵貴重書・館蔵和古書・マイクロ収集資料の一部、「コーニツキー版欧州所在日本古書総合目録」からケンブリッジ大学附属図書館所蔵の一部資料のデジタル画像を公開しました。

国文学研究資料館ホームページの電子資料館

(http://www.nijl.ac.jp/contents/d_library/index.html) からそれぞれのデータベースをご覧ください。(和田洋一)



〔当館所蔵「小教盛」絵巻の一面〕



〔電子資料館トップページ〕

● 次号までの閲覧室の開室予定カレンダー

青は休館日 黄色は土曜開館日

8月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23/30	24	31	25	26	27	28
					29	

9月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

10月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成21年7月10日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷所 三鈴印刷株式会社

©人間文化研究機構国文学研究資料館